

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第 1073 号	氏 名	浅野 純平
論文審査担当者	主 査 田中 榮司 教授 副 査 宮川 眞一 教授・小泉 知展 教授		

(論文審査の結果の要旨)

IgG4 関連疾患は様々な臓器に腫大や肥厚などの炎症性変化を来す慢性炎症性疾患と考えられる。慢性炎症と発癌の関連は以前より指摘されているが IgG4 関連疾患と発癌の関連に関しては一定のコンセンサスが得られていない。したがって今回、IgG4 関連疾患が一般人口と比べて悪性腫瘍を有意に多く合併するかを検討した。

対象は IgG4 関連疾患 158 名であり年齢中央値は 72 歳、フォローアップ期間中央値は 5 年であった。IgG4 関連疾患の悪性腫瘍発症における標準化罹患比を算出した。IgG4 関連疾患診断 3 か月以内に悪性腫瘍と診断された症例を同時診断例と定義し同症例を除外した場合の標準化罹患比も算出した。カプランマイヤー曲線を用い IgG4 関連疾患と一般人口の悪性腫瘍累積罹患率を比較した。悪性腫瘍発症に関連するリスク因子を抽出するために各種パラメーターを悪性腫瘍発症群と非発症群で比較検討した。自己免疫性膵炎は IgG4 関連疾患における膵病変と位置づけられており、自己免疫性膵炎に限定してのサブグループ解析を行った。

その結果、浅野は次の結論を得た。

1. IgG4 関連疾患の悪性腫瘍における標準化罹患比は 2.01 (95%信頼区間 : 1.34-2.69) であり一般人口と比べ有意に多く悪性腫瘍を発症した。
2. 同時診断例を除外した場合でも標準化罹患比は 1.60 (95%信頼区間 : 1.07-2.13) となり一般人口と比べ有意に多く悪性腫瘍を発症した。
3. カプランマイヤー曲線を用いた累積悪性腫瘍発症率での比較検討では IgG4 関連疾患は診断 12 年以内で一般人口と比べ有意に多く悪性腫瘍を発症した。
4. 悪性腫瘍の発症例においては血清 IgG4、免疫複合体、可溶性 IL-2 レセプターといった疾患活動性マーカーが診断時に高値であった。
5. 自己免疫性膵炎においては有意ではないものの膵癌における標準化罹患比が 6.81 と高値であった。

これらの結果より、IgG4 関連疾患は悪性腫瘍発症の危険群であると考えられた。診断から 12 年以内に診断時の活動性マーカーが高値である症例については悪性腫瘍発症をより警戒すべきである。自己免疫性膵炎の膵癌リスクに関しては関連の可能性はあるが、より大規模な検討が必要である。よって、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。